

■帝王賞 (JpnI) アラカルト (過去全 41 回の分析)

- ※第 1 回 (昭和 53 年) から第 8 回 (昭和 60 年) までは大井ダ 2,800m で実施
- ※第 9 回 (昭和 61 年) からは中央競馬招待競走として実施
- ※第 18 回 (平成 7 年) からは指定交流競走として実施
- ※第 20 回 (平成 9 年) からはダートグレード競走として実施
- ※第 15 回 (平成 4 年) は 2 頭が 1 着同着だったため、優勝馬は 42 頭、2 着馬は 40 頭
- ※第 9 回 (昭和 61 年) は 2 頭が 3 着同着だったため、3 着馬は 42 頭
- ※記録は令和元年 6 月 5 日時点

■ 1 番人気馬と 2 番人気馬の差に注目

単勝 1 番人気馬は 13 勝、2 着 11 回、3 着 5 回で、3 着内率が 70.7%、単勝 2 番人気馬は 8 勝、2 着 5 回、3 着 2 回で、3 着内率が 36.6%、単勝 3 番人気馬は 6 勝、2 着 7 回、3 着 7 回で、3 着内率が 48.8%となっている。単勝 1 番人気馬と単勝 2 番人気馬の成績差が大きい点に注意すべきかもしれない。

■ 人気馬が上位を占めた例は少ない

過去 41 回のうち 27 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。一方、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は第 34 回 (平成 23 年)、第 35 回 (平成 24 年) の 2 回だけだ。

■ “連覇”を果たせばレース史上初の快挙

帝王賞において 2 回以上の優勝経験があるのは、第 11 回 (昭和 63 年) と第 14 回 (平成 3 年) を制したチャンピオンスター、第 31 回 (平成 20 年) と第 33 回 (平成 22 年) を制したフリオーソ、第 36 回 (平成 25 年) と第 38 回 (平成 27 年) を制したホッコータルマエだけで、2 年連続の優勝を果たした馬はまだいない。なお、フリオーソは第 32 回 (平成 21 年) で 2 着となっており、3 年連続の連対は達成している。

■牝馬は4勝、外国産馬は優勝例なし

牝馬の優勝例は、第5回（昭和57年）のコーナンルビー、第19回（平成8年）のホクトベガ、第23回（平成12年）のファストフレンド、第26回（平成15年）のネームヴァリューと、これまでに4例ある。なお、外国産馬は第21回（平成10年）でバトルラインが、第23回（平成12年）でドロールアラビアンが2着となったものの、まだ優勝馬はいない。

■4～6歳の馬が中心

馬齢別の勝利数を見ると、4歳が11勝、5歳が13勝、6歳が12勝、7歳が5勝、8歳が1勝となっている。

■JRA勢が一步リード

中央競馬招待競走となった第9回（昭和61年）以降の計33回に限ると、地方所属馬は14勝、2着11回、3着17回、JRA所属馬は20勝、2着21回、3着17回となっている。3着以内馬延べ100頭に対する割合で示すと、地方所属馬は42%、JRA所属馬は58%だ。

■騎手別の歴代最多勝記録は「5」

騎手別の勝利数を見ると、5勝の武豊騎手が単独トップ。高橋三郎騎手、的場文男騎手が3勝で2位タイとなっている。

■調教師別の歴代最多勝記録は「4」

調教師別の勝利数を見ると、4勝の川島正行調教師が単独トップ。秋谷元次調教師、朝倉文四郎調教師、西浦勝一調教師、松田博資調教師が2勝で2位タイとなっている。

■8枠が健闘しているものの15～16番は優勝なし

枠番別勝利数を見ると、3枠（9勝）が単独トップ。8枠（8勝）が単独2位、6枠（7勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、1番、3番、4番、6番（各5勝）がトップタイ。10番（4勝）が単独5位だ。ちなみに、優勝馬が出ていない馬番は15番と16番のみである。